

＜書 評＞

笹沼澄子（東京都老人総合研究所リハビリテーション医学部長）他 編

失語症の記録

—奪われた言葉・取り戻した言葉—

木村彰男（慶大月が瀬リハセンター）

本書は、脳血管障害により失語症となった患者さん自身の手記を中心に構成されている。全体は三部より成り、第一部と第二部がそれぞれ二人のタイプの違う失語症の患者さんの手記で、第三部は編者らによる失語症の概説となっている。

第一部は、中等度のブローカ失語の患者さんの記録で、本人の記録と同時に妻の記録が併記されている。発病当初よりの十年以上にわたる闘病の記録であるが、失語症に対する訓練の過程は勿論のこと、その間のけいれん発作、バイパス手術などを経ての決して平坦ではなかった社会復帰への道のりが克明に描かれている。

特に言語障害を持つ患者さんの職場復帰の厳しさを改めて感じさせられる。

第二部、中等度の伝導失語の患者さんの記録で、失語症の症状、言語訓練の過程、専門家による評価が詳細に記述されている。掛け算の九九の反復訓練、音を組み合わせる訓練など具体的内容も多く一般の読者にも興味深く読まれることと思われる。

第一部、第二部を通じて専門的知識を必要とされる箇所には、欄外に編者らによる解説が付け加えられており、医療従事者以外の読者への配慮がうかがわれる。勿論、リハビリ

医、言語治療士など専門家にとっても、手記を詳細な評価記録と併せて読むことができ、臨床の場で大いに参考になると期待される。

第三部および付録は、失語症と脳卒中を極めて簡潔にわかりやすく解説しており、更に巻末には失語症治療機関と、失語症患者会の一覧表も載せられており、現在、失語症と闘っている患者さんおよびその家族にとっても極めて役に立つ内容豊富な本といえる。

近年、脳卒中の治療が進歩するにつれ、障害を残して社会復帰するケースが増えてきているが、その際、言語障害は極めてやっかいな問題である。本書は、そのような現実の問題を浮きぼりにしており、失語症の患者さん、その家族のみならず、医療福祉関係の方々にも勧めたい書物である。

（四六版、頁 378、1985、¥ 1,800
大修館書店 刊）